P2-012

自閉症スペクトラム児の耳鼻咽喉科診療において問題となる行動

玉川 あゆみ[1)]、泊 祐子[2)]

滋賀県立大学　人間看護学部[1]、
大阪医科大学　看護学部[2]

【背景】
自閉症スペクトラム障害をもつ子ども（以下、ASD 児とする）は、障害特性や感覚過敏などの症状により、特に耳鼻咽喉科への医療受診に対する困難さがあるといわれている。特に口腔や鼻腔、外耳道に感覚過敏がある場合は、診療に対して激しく抵抗することになり、診療が困難となることが多い。
【目的】
耳鼻咽喉科診療において ASD 児が抱える問題となる行動を明らかにする。
【方法】
2019 年 9 月～ 12 月に ASD 児の耳鼻咽喉科診療に携わっている医療者のうち同意の得られた 10 人を対象に半構造化面接調査を実施した。調査を実施するにあたり、倫理審査委員会の承認を得たのち、対象者に調査の趣旨およびプライバシーの保護について説明し、同意を得た。面接の内容は許可を得て IC レコーダーに録音し、逐語録を作成した。逐語録から、耳鼻咽喉科診療において ASD 児が抱える問題となる行動が解る文脈に着目し、類似性と相違性に基づき、サブカテゴリ、カテゴリを抽出した。以下、カテゴリは《　》サブカテゴリは〈　〉で示す。
【結果】
対象者の年齢は 30 代～ 50 代であり、女性 9 人、男性 1 人であった。医療者の職種は、看護師 7 人、医師 2 人、ホスピタルプレイスペシャリスト 1 人であった。耳鼻咽喉科診療における ASD 児が抱える問題となる行動は、3 つのカテゴリと 14 のサブカテゴリが抽出された。《診療行動に移ることが難しい》は〈落ち着きがなく動き回る〉〈診療以外の自分の興味のあるものに集中してしまう〉〈診療を受けることに対して納得するまで時間がかかる〉〈初めてのことに対する不安が大きい〉で構成された。《診療に対するイメージや見通しが持てないことでの不安や恐怖を表現する》は〈怖くて診察室に入れない〉〈診療が怖くて逃げだす〉〈何をされるか解らないことに対して、自分を守るために暴れる〉〈突然の予定変更に対応できない〉〈診療が怖くて診察台に座れない〉〈見慣れない器具が怖い〉〈不快な体験や記憶をいつまでも保存する〉で構成された。《感覚の敏感さに対する痛みや恐怖がある》は〈耳や鼻を触られることを嫌がる〉〈特定の音や光刺激が苦手〉〈一度に多くの指示が入らない〉で構成された。
【考察】
今回の調査で、ASD 児が何に対して不安や恐怖を感じて、どのような問題となる行動として表れているのかが明らかになった。今後は、それに対する具体的な支援を検討する。

P2-013

思春期の自閉スペクトラム症患児が特性を受け入れていく過程における看護

石川 美咲

自治医科大学附属病院とちぎ子ども医療センター

【背景・目的】A 病院に入院する自閉スペクトラム症（以下 ASD とする）患児の多くは、対人関係や環境の変化により学校や家庭での不適応を起こしていることが多い。ASD をもつ人が、思春期を円滑に乗り越え、その後も安定して適応していくためには、生涯にわたって理解者に恵まれ、機能にあったコミュニケーションを支援され維持していくことが望まれる。そのためにも、本人が自分の特性を理解し、周りに困りごとを言語化し対処していくことは必要な課題であると考える。今回 10 代前半の 5 年間に 5 回入退院を繰り返し、その過程で障害の告知を受け、徐々に自分の特性を受け入れ理解を深めていった症例を経験した。患児が特性を受け入れていく過程における看護の関わりを振り返ることで、ASD の患児が、障害の告知を受けた際の看護に活かしたいと考えた。
【倫理的配慮】倫理的配慮として、患児と母へ書面を用いて口頭で説明し、同意書に署名を得た。院内の倫理審査において、承認を得た。
【方法】X 年～ X ＋ 5 年の 5 回の入院中の診療記録の中から、患児の言葉や反応と看護師の関わりを診療記録から抽出し分析する。
【結果・考察】初回の入院時に特性の説明がされた。その後、環境の変化や対人関係でのつまずきから入退院を繰り返した。5 回の入院を分析すると《関係構築の時期》から《特性の理解を深め、対処を学ぶ時期》を経て《自己選択ができた時期》と 3 つの時期に分けることができた。すべての時期を通して、患児の思いを否定せず受け止め傾聴に努めた。このことは患児との関係構築から情緒的なやりとりに繋がったと考える。《特性の理解を深め、対処を学ぶ時期》では、SST など教育的介入、更に日常生活のなかで患児自身の傾向や特性に気付けるような声かけを行い、対処法を一緒に考えた。これらのことが自身の特性の理解を深めることにつながったと考える。そして、この時期を経て、自分に合った進路を自己選択することにつながったと考える。患児自身が特性を理解することで、過ごしやすさや患児自身に合った環境の選択につながっていくと考える。そのため、今後も思春期の発達障害のある患児 1 人 1 人の特性を踏まえ、関係職種と連携しながら患児にあった支援を検討していきたい。

一般演題

Presented by Medical*Online